神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	神奈川県内の高遠石工の活動―江戸時代中期から明治時代末期における石造物の造立状況―
著者	新井裕美
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 44 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2018 年（平成 30 年）1 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【研究ノート】

神奈川県内の高遠石工の活動
―江戸時代中期から明治時代末期における石造物の造立状況―

新井裕美

【要旨】

本稿では、近世以降に現在の神奈川県域である相模国と武蔵国内で造られた各種石造物の銘から、信濃国―特に伊那郡高遠藩出身（長野県伊那市）―の高遠石工の活動を分析する。高遠石工は、江戸時代前期頃から同国内・甲斐・上野・相模・武蔵・駿河・美濃などへ出稼ぎに行き、滞在先で様々な石造物の製作に従事した。着目する対象は、近世中期以降に庶民信仰の隆盛に伴って造立された地蔵や庚申塔など信仰に関わる石造物、石段等の建築物、そして高遠石工自身の墓である。

この分析から、造立年代、造立地域、石工の出身地については明確な傾向があることが判明した。造立年代のピークは宝暦十一（一七六一）から明和七（一七七〇）年で一一基あり、造立が断続的ながらも多くみられたのは厚木市域、伊勢原市域、平塚市域であった。石工の出身地は、高遠藩領藤沢郷のうち北原村と荒町村が多かった。

【キーワード】

高遠石工　石造物　出稼ぎ

はじめに

筆者は、平成二十七（二〇一五）年度開催の特別展「石展―かながわの歴史を彩った石の文化―」（於当館）及び平成二十八（二〇一六）年度開催企画展「石展2―かながわの大地が生み出した石材―」（於神奈川県立生命の星・地球博物館）において、神奈川県内における高遠石工の活動について調査研究を行いその成果を展示したが、両展示だけでは全てを紹介することが出来なかった。[1] そこで本稿ではそれらを補いつつ、県内の高遠石工の活動を取り上げる。

高遠石工は、江戸時代前期頃から信濃・甲斐・上野・相模・武蔵・駿河・美濃等の各地へ出稼ぎをし、その造立物を各地に残している。本稿はこれらの出稼ぎ先のうち、現在の神奈川県域に造立された各種石造物の銘から高遠石工の活動を分析する。現在の神奈川県域は旧相模国と武蔵国の南部がそれに当たるが、本稿では二つの旧国域を包括できる「神奈川県」という呼称を用いてその範囲を分析対象とした。また抽出したデータは県内刊行の自治体誌や報告書等に依った。県内の高遠石工の研究は、鈴村茂の厚木市七沢地域における高遠石工の活動を述べたものや、[2] 澤田五十二の県内の高遠石工による石造物の報告などがある。[3] 近年は各市町村又は澤田のような個人による調査によって高遠石工による石造物は少しずつ報告されてきてはいるが、それらを総合的に分析し、個々に刻まれた銘を分析することはほとんど行われてこなかった。本稿では高遠石工による石造物に刻まれた銘に着目していくことにする。[4]

一　神奈川県内の高遠石工による石造物

表1は神奈川県内の「信濃国石工」又は「高遠石工」の銘を有する石造

物の一覧で、七八件を収集した。この中から①造立年代、②造立地域、③石工の出身地、④石工の協働、の四点に着目して分析を行うこととする。

(1) 造立年代

表2は、表1をもとに便宜上十年ごとに造立年代を区切り、石造物がある地域のみを挙げて集計したものである。県内の高遠石工による石造物の初出は、表1 No.1厚木市下荻野新宿にある宝永三（一七〇六）年の題目塔である。その後も厚木市や伊勢原市を中心として幕末まで断続的に続き、明治時代前期でも厚木市や清川村では造立がある。宝暦十一（一七六一）年から寛政十二（一八〇〇）年にかけての造立数は全体の約六割を占め、中でも宝暦十一（一七六一）年から明和七（一七七〇）年は最多の十一基にもなる。神奈川県内においても、概して一七〇〇年代以降から庶民信仰の隆盛によって各種石造物が盛んに造立され始めるが、この年間の造立数が他の年代と比べて突出している理由は不明である。

(2) 造立地域

表2から造立地域については、厚木市や清川村が属する愛甲郡と伊勢原市や平塚市が属する大住郡に造立が集中していることが特筆される。厚木市や伊勢原市での製作数が突出しているのは、当地域が七沢石の産出地であったことと無関係ではなかろう。七沢石とは、厚木市七沢を中心に産出し、その採掘の開始は定かではないが江戸時代前期から昭和三十八（一九六三）年までの約三〇〇年間にわたり採掘された石材である。[5] また、伊勢原市日向（ひなた）・上粕屋では昭和四十五（一九七〇）年まで日向石が、清川村煤ケ谷では煤ケ谷石が採掘された。これらは七沢石と同じく火山礫凝灰岩もしくは粗粒凝灰岩で、丹沢層群煤ケ谷亜層群大沢層及び谷太郎層に属し、広義の七沢石と称することもある。七沢石はねばりがあって道具のつきが良い（滑らかな加工ができる）ので細工に向いているといわれ、仏石（墓石）や建築用材、特に火に強いのでかまどには最適であったという。[6] 石材供給地でその加工に携わることは、受注にすばやく対応できて効率的であったはずである。

明治時代以降の製作は二基（No.74・75）ある。江戸時代末期に近づくにつれて高遠石工の活動が減少する理由として、高遠藩領内で養蚕業が盛んになり出稼ぎをせずに主に自営の家業に携わるようになったことが挙げられている。[7] また明治時代になってから居住の制限が解かれたことにより領内よりも仕事や利益を多く得ることができた出稼ぎ地へ定着・永住したことと、高遠石工以外にも地元の石工が増加したためという指摘もある。[8] 厚木市七沢では、当地に定着し現在でも石屋を営んでいる高遠石工の子孫がいる。

(3) 石工の出身地

高遠藩領内の筑摩郡洗馬（せば）郷七ヵ村と伊那郡六ヵ郷（上伊那・春近・川下（かわくだり））・中沢・藤沢・入野谷）のうち、藤沢郷は特に出稼ぎの石工も多かったようである。元文六（一七四一）年に飯田藩士の宮崎言周が編述した『信州伊那郡村鑑』には、「藤沢庄十六ケ村　藤沢十六ケ村ニ石切五百人程有テ運上納ル」とあり、藤沢郷から多数の石工が領外へ出稼ぎをして運上金を納めていたことが記されている。[9] 表1 No.1「信州石屋　北原□兵衛」の「北原」とは伊那郡藤沢郷北原村出身の者であろう。銘に出身地を北原村と記したもの（No.49・55・64・72）や、北原姓と記した北原村出身者の可能性があるもの（No.6・11・30・33［一基中に二人の北原姓あり］、42・49・50・53・55・64・68・72・77）と、先のNo.1を含めると十四基

になり、信濃国出身の石工の中では藤沢郷北原村と記したものが最も多い。それに次ぐのが藤沢郷荒町村出身者によるもので四基ある（No.2・51・53・76）。

（4）石工の協働

石工が石造物を製作する際には、単独又は複数の石工と協働の場合があった。最多人数が携わっていたのは表1 No.3「信州高遠領　忠兵衛　長五郎　甚助　与茂之丞　磯右衛門　源左衛門　伊左衛門　甚五兵衛」で、八人の石工が大型（六二×一一九×七〇cm）の手水鉢を製作している。さらに石工が協働したものの中には、信濃国内の出身地が異なる石工が協働した場合と信濃国と他国の石工が協働した場合とがある。前者はNo.24「石工当国田村　平四朗　信州国田原　直右衛門　信州殿島　喜左衛門　同甚七」とあり、信濃国内の出身地が異なる三人の石工と相模国の石工一名が協働をしている（「信州国田原」は高遠藩領春近郷田原村、「信州殿島」は同春近郷殿島であろう）。後者はNo.31「石工煤ヶ谷　三右衛門　同　藤兵衛　同　六左衛門　信州　太左衛門」とあり煤ヶ谷（神奈川県清川村）の石工と、No.58「生国信州高遠　石工　清七　江戸本石町石工　長次郎」とあり江戸（東京都中央区日本橋）の石工と協働している。[10] 上記の協働製作からは、「信州出身の石屋は、在地の石屋をシタノモンとか村のモン（者）といったが、仕事上は特に区別がなかったという」という聞き書きが想起されるが、[11] その一方で出身地を離れた他国での石工稼業には地元の石工と利権をめぐって衝突が発生したこともあった。[12]

二　高遠石工自身の墓石と過去帳

出稼ぎに赴いた高遠石工は、藩へ運上金を納めるために帰郷したが、中には帰郷できずに出稼ぎ地で没した者もいた。厚木市七沢の広沢寺や伊勢原市日向の名主であった鍛代（きたい）家には高遠石工自身の墓石や過去帳が残されている。当家では高遠石工が寄宿しながら石材加工を行っていたとされている。表3は、郷里を離れた地で没した石工やその家族の墓石又は過去帳の一覧である。墓石又は過去帳には、石工自身の名前の他に、出身地、享年、戒名、主従・血縁関係などが記されている。No.14「信州高遠藤沢荒町村　俗名伊藤彦八　行年二十五歳　半左衛門弟」とNo.16「信州高遠藤沢荒町村　俗名伊藤彦八　行年七十七歳　半左衛門父」は血縁者であろうか。また、No.19「信州石工　国太郎母」やNo.29「本覚自性大姉　信州上伊那郡長藤村黒沢笠原　宇之太郎妻登良」のように石工の家族の墓石も残されている。墓石や過去帳からみる最多の出身地は、藤沢郷の荒町村であった（No.6・9・13・14・15・16・23）。表中以外では、鍛代家には八基の石工の墓石の他に二基の童子とされる墓もある。[13]

おわりに―まとめにかえて

前述した県内の高遠石工の活動に関する（1）～（4）の視点のうち、（1）・（2）・（3）については明確な傾向をみることができた。以下ではそのまとめと課題を三点挙げてみよう。

（1）造立年代

ピークは一七六一年～一七七〇年の間であり、一八〇〇年頃までは比較的造立数があるが、それ以降は以前の数に比べると低調である。この時期は庶民信仰の隆盛により石造物が増加したり庶民が墓石を建て始めたりする時期であるため、石工にはその受注も多々あったことが推察できるが造立数はそれに呼応していない。その理由に対する答えはまだ持

ち合わせていないが、出稼ぎをさせた要因として高遠の経済状況や藩政と併せて考察していく必要がある。

(2) 造立地域

表2で示したように七沢石の産出地である愛甲郡と大住郡を中心にして、地域的な偏りがあることがわかった。これは高遠石工の活動範囲とも言い換えることができよう。近年は七沢石製品の流通と高遠石工の活動を関連づける研究が行われてきており、平塚市域では内陸部（七沢石の産出地に近い北西部）に[14]、横浜市域では鶴見川上流にその活動範囲がみられるという報告がある[15]。一方で、相模湾沿岸、相模川下流域、鶴見川下流域では県西部で産出する安山岩製の製品が多くあり、石の流通には川や海の水運を利用して運ばれたと結論づけている。今後は他の地域においても用いられた石質の違いや、高遠石工と高遠石工以外の石工（出稼ぎ先の在地側の石工）との関連性を探ることが重要になるだろう。

(3) 石工の出身地

石工が出稼ぎに赴く際は、行き先、自身の名前、寄宿先、不在中を引き受ける者を記した書上帳を藩の役人等へ提出した。今回の分析では、北原村と荒町村出身とみられる石工が最多であったが、高遠石工の出身地である伊那市に残る書上帳と出稼ぎ地に遺された作者名とを併せて考察することも必要である。

石工は製作した製品全てに自身の名前や出身地を刻んだわけではない。例えば墓石（石工自身の墓石は除く）、石臼、建築物の基壇・石垣などの生活の中の身近なものも高遠石工は携わっていたであろうが、これらに石工銘は記されないためにその活動の全てを把握することは困難である。また、石造物によっては風化によって銘の摩滅又は亡失してしまったものもある。そこで必要となるのは、他国での高遠石工の活動とも併せて捉えることである。今日の高遠石工に関する研究はそれぞれの地域内の分析にとどまっているが、それを統合・比較することによってより具体的な高遠石工の活動実態をつかむことが可能になると考える。

補足ながら、本文で挙げた石造物以外にも高遠石工の活動の足跡として名工として知られる守屋貞治に関するものがある。守屋貞治（明和二［一七六五］～天保三［一八三二］年）は、高遠藩藤沢郷塩供村［伊那市高遠町長藤］の生まれで、天保二（一八三一）年に自身の生涯の中で手がけた石造物を『石仏菩薩細工』にまとめた。その記載の中には「一延命地蔵　サガミ足柄郡　山北村」とあるが[16]、山北町内に守屋貞治の銘が記された地蔵の報告は未見である。

註

(1) 特別展図録『石展』神奈川県立歴史博物館、二〇一六年。

(2) 「七沢石」『野だちの石造物』厚木市教育委員会、一九七二年、二六六～二七九頁。『厚木の職人史』県央史談会、一九八〇年、五五～七三頁。

(3) 「相模における高遠石工の石造物」『かながわ文化財』一一一、神奈川県文化財協会、二〇一五年、二一～四一頁。

(4) なぜ高遠出身の石工が他国で石屋業をすることになったのであろうか。元禄四（一六九一）年に先代の鳥居氏に替わり摂津国から高遠へ内藤清枚が入封し、その支配は明治維新に至るまで続いた。内藤氏が入封する前年には幕命により松代藩三代藩主真田幸道が厳しく高遠藩の検地を行い、その結果常に財政難にあえぐこととなった。高遠石工を各地に輩出した理由として、『高遠町誌』では以下の七つの理由を挙げている。

一　高遠領内の藤沢郷・入野谷郷は山間部で耕地狭く、地味もやせており、

農耕だけでは生計が立ち難かった。そこで家計を立てるために何か道を求めなければならなかった。

二　幸せなことに藤沢郷・野谷郷地籍には、俗称高遠石又は青石といって、閃緑岩・安山岩などの産出が所々にあり、また花崗岩も産出した。

三　採石、石積等ならば最低ゲンノウ一丁、クサビ若干あれば間に合った。石材があり、道具の入費がかからぬとすれば、石工は最もとりつき易い道であった。

四　本石切になれば日当も高くとれた。

五　飢饉・洪水・厄病等がしばしば起こり、庶民は神仏に頼るため、諸種の講が結成され、江戸中後期には社寺の巡拝が繁く行われ、石仏・石塔・石碑・社寺の石造物などの造立が盛んになり、石工の仕事が繁昌した。

六　高遠藩は石工の旅稼ぎを奨励した。藩財政を補う為に稼ぎ高に課す運上金が目的であった。

七　藤沢郷・入野谷郷等で村内多数の石工達のかもす雰囲気は、年少者をも刺激し、続々と後継者を輩出したと考えられる。

（高遠町誌編纂委員会『高遠町誌』上　歴史二、高遠町誌刊行会、一九八三年、二七三～二七四頁）

通説的に、高遠石工の出稼ぎの理由として高遠藩に入封した内藤氏の経済政策である一及び六を中心として論じられることが多いが、笹本正治はいずれの説にも否定的である。笹本はその理由として、高遠は江戸時代以前までは交通の要衝であったためにいち早く社会の需要に応えることができたことと、中世期から番匠、鍛冶屋、板を作る職人らが集住しており石工の要望に沿った道具を即座に作ることが出来た、等としている（「全国に羽ばたいた高遠石工」『再発見！高遠石工』、二〇〇五年、一二九～一七五頁）。しかしながら筆者には笹本の指摘するところの条件は高遠以外にも当てはまり、これが高遠特有で、当地域から石工が輩出された決定的な理由になったとは思えない。また、秋山敬も高遠石工の出稼ぎは内藤氏の奨励策によるものだけではないとしている。藩政以前の高遠石工の作例として、山梨県甲府市湯山の塩沢寺の無縫塔（正保五［一六四八］年）及び南アルプス市上宮地の八幡神社の鳥居（寛文十一［一六七一］年）を挙げて、内藤氏の藩政開始時期と時を同じくして「高遠石工」の銘が登場するのは、「出稼ぎがこの時から始まったことを意味するのではなく、藩の［公認］によって在地名を刻むことに対する石工達の心理的規制が弱まったためとみるべきではないか」としている（「近世甲斐における高遠石工」『再発見！高遠石工』、二〇〇五年、三八～三九頁）。

(5) 七沢石製の石造物の中で、最古の紀年名を持つものは、平塚市北金目の不動院の参道に祀られている地蔵で、万治二（一六五九）年の銘がある。

(6) 二〇一五年の筆者聞き書き調査。厚木市七沢で長年石工をされていた前場近氏の御教示による。

(7) 同前（4）、『高遠町誌』、二八四頁。宝暦七（一七五七）年十月と安政四（一八五七）年十二月作成の「御取箇外物帳」で、高遠領の石工が納めた運上金を比較すると、藤沢郷と入野谷郷ではその額が増加しており、運上金の増額が石工活動の拡大をそのまま反映しているとするならば、両郷では石工の活動が活発になっていったといえるのではないか。反対に高遠石工の活動が減退した理由にしばしば養蚕業の隆盛が挙げられるが、両「御取箇外物帳」の「蚕種運上金」額はほぼ横ばいである（長野県『長野県史』近世史料編　四（一）南信地方、社団法人長野県史刊行会、二一三～二一四、二二八～二三〇頁）。ここでは宝暦七年における江戸での金一両につき銭が四、一八五～四、三一〇貫文であるため、一両を四三〇〇文として算出した（村山直・高橋正彦監修『日本史資料総覧』、東京書籍、一九八六年、一七四、一七九頁）。

(8) 同前（4）、笹本、一四二～一四四頁。

(9) 『新編信濃史料叢書』四、信濃史料刊行会、一九七一年、二〇二頁。同前（4）、『高遠町誌』、二八五頁にも藤沢郷の石工は、相模、甲斐、上野へ出稼ぎに向かった者が多かったとある。

(10) 愛川町小沢の諏訪神社の棟札（明和八［一七一一］年）にも「信州石屋　太左衛門」とある。ここには地元の大工、木挽き、屋根屋らと協働して社殿を造ったことが記されている。愛川町文化財保護委員会『愛川町の小祠・小堂―高峰地区―』

愛川町教育委員会、一九七二年、一二～一四頁。

(11) 厚木市文化財協会『厚木の民俗一（生業一）』厚木市教育委員会、一九八一年、一一一頁。

(12) 同前（4）、『高遠町誌』、二八〇～二八四頁の「藤沢郷石切仲間相州新丁場差止願」（文化八［一八一一］年）、「旅稼石切新丁場一件咎申渡し」（文化十［一八一三］年）、同前（7）、『長野県史』四〇四～四〇八頁等。

(13) 伊勢原市史編集委員会『伊勢原の民俗―職人の生活と技術―』、一九九六年、五二頁。

(14) 早田旅人「近世平塚周辺の石工と石材流通―石工銘と石材による試論」『平塚市博物館研究報告』三八、二〇一五年、一～一〇頁。

(15) 横浜市歴史博物館『鶴見川流域のくらし　生業・水運・信仰』横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団、二〇一五年、三八頁。横浜市歴史博物館『歩いた・見た・調べた　横浜市歴史博物館　民俗に親しむ会　鶴見川流域フィールドワーク調査報告』、横浜市ふるさと歴史財団、二〇一五年。

(16) 同前（7）、『長野県史』、四〇九～四一一頁。

表１　神奈川県内の高遠石工による造立物

No.	和暦	西暦	銘文	造立場所	石造物の種別	出典
1	宝永三	1706	「信州石屋　北原□兵衛」	厚木市下荻野新宿　個人宅墓地	題目塔	1、66頁 2、148頁
2	宝永七	1710	「信州高遠荒町村石屋　甚助作」	厚木市愛名　妙昌寺	題目塔	3、124頁
3	正徳二	1712	「信州高遠領　忠兵衛　長五郎　甚助　与茂之丞　磯右衛門　源左衛門　伊左衛門　甚五兵衛」	厚木市七沢　観音寺	手水鉢	3、274頁 4、9頁 5、166頁
4	正徳二	1712	「石屋　信州伊那郡　保科三左ェ門」	厚木市上古沢　諏訪神社	石段	6、169頁
5	正徳四	1714	「信州高遠住　石屋忠兵衛」	厚木市下古沢　本照寺	石段	2、189頁
6	享保二	1717	「大工信陽住　北原四方之丞」	伊勢原市岡崎　芳圓寺	地蔵	4、12頁 7、20頁 8、173頁
7	享保三	1718	「寄進　信州伊那郡　石屋清水平四朗」	平塚市田村　八坂神社	手水鉢	3、266頁 4、19頁
8	享保四	1719	「信州石屋　伊藤甚助」	厚木市下荻野　法界寺	地蔵	1、67頁 3、274頁
9	享保五	1720	「信州　□右衛門」	伊勢原市東大竹　大宝寺	地蔵	9、51頁
10	享保七	1722	「信州　万之助　忠兵衛　同　磯右衛門　同　友右衛門　同　武兵衛　同　奥右衛門　同　弥五兵衛　同　喜右衛門」	厚木市七沢　観音寺	宇賀神	1、67頁 3、274頁 5、166・167頁
11	享保九	1724	「工匠　信州高遠　北原四方之丞　同　右門　同　長左門」	伊勢原市岡崎　養国院	多宝塔	4、13頁 8、127頁
12	享保十二	1727	「信州高遠住　石工　伊藤友右衛門　小池武兵衛」	秦野市北矢谷　長昌寺跡	一字一石塔	4、20頁 10、43頁
13	享保十六	1731	「信州高遠之住　伊藤友右衛門作」	伊勢原市大山　個人宅	地蔵	1、67頁 8、7頁
14	享保十七	1732	「信州高遠之住　伊藤政兵衛」	相模原市津久井町鳥屋　東福寺	万霊塔	4、26頁
15	元文元	1736	「高遠石工　伊藤政兵衛」	相模原市城山町都井沢	地蔵	4、22頁
16	元文四	1739	「信州伊那郡高遠村　石屋又八郎」	平塚市豊田　宗圓寺	題目塔	11、67頁
17	元文五	1740	「石屋　信州高遠町　[　　]」	清川村煤ヶ谷御門	地蔵	1、66頁 3、273頁 12、69頁
18	元文五	1740	「信州石工　伊藤政治兵衛　久太良」	相模原市城山町中沢　飯綱神社	灯籠	4、23頁
19	延享四	1747	「信州高遠中伊那郡新田　石工　比市皇金平　同苗久米」	箱根町芦ノ湖賽ノ河原	地蔵	4、36頁
20	宝暦三	1753	「信州高遠上山田村　大工　小池磯右衛門　作」	平塚市大神　正安寺	観音	4、17頁
21	宝暦六	1756	「石工信州高遠城下　大石荘蔵」	綾瀬市小園	道標	1、66頁 3、273頁
22	宝暦十	1760	「信州高遠下新山村　石工　原理八」	南足柄市生駒　玉伝寺	宝篋印塔	4、35頁 13、17頁
23	宝暦十三	1763	「信州石工　文左衛門　太佐衛門」	相模原市城山町　普門寺	灯籠	4、23頁
24	宝暦十三	1763	「石工当国田村　平四朗　信州国田原　直右衛門　信州殿島　喜左衛門　同　甚七」	座間市入谷　星谷寺	宝篋印塔	4、26頁
25	宝暦十三	1763	「石工　信州中伊那郡□刺山邑　上沼茂右衛門　間澤勝右衛門」	南足柄市塚原　長泉寺	山門碑	4、35頁
26	明和元	1764	「信州高遠城下　大石庄蔵彫之」	清川村煤ヶ谷尾崎	道標	1、66頁 12、65頁
27	明和二	1765	「信州高遠住石工　弥市」	厚木市愛名　妙昌寺	題目塔	3、274頁
28	明和三	1766	「石工信州高遠町　大石庄蔵」	伊勢原市日向　宝城坊	聖徳太子	15
29	明和四	1767	「信州高遠石工　大石荘蔵」	清川村煤ヶ谷湯出川	道標	1、66頁 2、189頁 14、25頁
30	明和四	1767	「石工　信州伊奈郡高遠領藤沢郷　北原弥市」	綾瀬市深谷　大法寺	題目塔	1、67頁 3、274頁
31	明和五	1768	「石工煤ケ谷　三右衛門　同　藤兵衛　同　六左衛門　信州　太左衛門」	愛川町上三増	地蔵	1、64頁 14、27頁 16、10頁
32	明和六	1769	「信州高遠田原村石工　伊藤儀右衛門」	相模原市津久井町青根音久和	地蔵	4、25頁
33	明和六	1769	「信州高遠石工　秋山惣助　北原長右衛門　稲村伊右衛門　北原友右衛門　角右衛門」	清川村煤ヶ谷　八幡神社	鳥居	1、67頁 3、274頁 14、26頁
34	安永七	1778	「信州高遠　施主　伊藤新八」	厚木市七沢　徳雲寺	万霊塔	1、67頁 3、274頁
35	安永七	1778	「信州高遠細工人　向山弥市」	海老名市大谷　福寿院	宝篋印塔	1、67頁 3、274頁
36	安永七	1778	「信州高遠之石工　與[惣]」	平塚市金田	宝篋印塔	17、9頁
37	安永八	1779	「信州高遠　伊藤久太□」	相模原市城山町穴川　明観寺	宝篋印塔	4、24頁
38	安永九	1780	「石工信州之産人　常五郎」	二宮町二宮　知足寺	宝篋印塔	4、38頁

39	安永九	1780	「信州高遠田原村　石工　酒井武久之丞」	相模原市藤野町牧野小舟　遍照院跡	万霊塔	4、25頁
40	天明元	1781	「信州高遠領石大工　伊東久六」	相模原市大島	宗祖遠忌塔	18、62・68頁
41	天明四	1784	「石工　信州高遠住　伊藤新八」	海老名市国分　龍峰寺	源頼朝碑	1、68頁 3、274頁 4、29頁
42	天明五	1785	「信陽高遠　石工　高島清七　北原藤右ヱ門　藤木團蔵」	相模原市上九沢　梅宗寺	如意輪観音	19、40・72頁
43	天明七	1787	「信州伊奈郡高遠石工　伊東民祐」	相模原市城山町葉山島　蓮葉寺	地蔵	4、22頁
44	寛政二	1790	「石工　信州住　伊藤新八」	伊勢原市下糟谷　若宮八幡宮	鳥居	1、68頁 3、274頁 8、221頁 20、88頁
45	寛政二	1790	「石工信州住　伊藤新八」	海老名市国分　龍峰寺	手水鉢	1、68頁 3、274頁 4、29頁
46	寛政四	1792	「石工高遠住人　利右ヱ門」	山北町世附（現在は山北町向原　能安寺）	万霊塔	4、33頁 21、201頁
47	寛政四	1792	「石工　信州高遠領櫻井村住人　黒河内治右エ門」	南足柄市苅野　泉蔵院	宝篋印塔	4、34頁 22、6頁
48	寛政六	1794	「信州石工　高遠　秋山甚四郎」	海老名市河原口	庚申塔	1、68頁 3、275頁 23、64頁
49	寛政六	1794	「信州高遠北原村　石匠　北原藤右衛門」	厚木市幸町　宝安寺	地蔵	1、68頁 3、275頁
50	寛政八	1796	「石工　信州　北原茂右ヱ門」	伊勢原市岡崎　無量寺	地蔵	7、13頁
51	寛政八	1796	「石工　信州高遠領荒町村　秋山惣助」	藤沢市大庭　宗賢院	宝篋印塔	4、29頁 24、429頁
52	寛政十	1798	「石工信州之産　酒井常五郎」	二宮町山西　宝蔵寺	宝篋印塔	4、37頁
53	文化二	1805	「信州伊那郡高遠領荒町邑　石工北原清左衛門　長英」	平塚市入野　成願寺	地蔵	25、62頁
54	文化二	1805	「信州高遠［　］　石工［　］」	厚木市飯山　竜蔵神社	鳥居	1、68頁 3、275頁
55	文化三	1806	「信州伊奈郡高遠領北原村石工　北原与兵衛」	伊勢原市日向　諏訪神社	手水鉢	1、68頁 3、275頁 8、105頁
56	文化五	1808	「石屋　信州高□□　□□□□」	清川村煤ヶ谷御門	地蔵	4、10頁
57	文化十一	1814	「信濃国高遠住　市右衛門　卯吉　七内　彦八　清左ヱ門」	伊勢原市上粕谷　上粕谷神社	由緒碑	4、15頁 8、94頁
58	文政二	1819	「生国信州高遠石工　清七　江戸本石町石工　長次郎」	厚木市金田　妙純寺	題目塔	4、8頁
59	文政二	1819	「信州之住人」	厚木市飯山　長谷寺	宝篋印塔	2、190頁
60	文政三	1820	「石曳人力凡五百員余　信揚高遠　藤沢住　工師　岩崎善兵衛」	山北町谷蛾　円通寺	万霊塔	4、34頁
61	文政四	1821	「石工　信ノ　有光」	南足柄市苅野　足柄神社	法華経四千部供養塔	22、10頁
62	文政六	1823	「信州高遠石工　［　］」	厚木市七沢　中沢橋	橋供養碑	1、68頁 2、190頁 3、118頁
63	文政六	1823	「信州高遠石工［　］」	厚木市七沢	地蔵	3、275頁
64	文政九	1826	「石工　信州伊那郡　北原村　北原与兵衛」	平塚市城所　浄心寺	宝篋印塔	26、78頁
65	天保三	1832	「信州　市兵衛　富茂蔵　与兵衛」	伊勢原市日向　白髭神社	手水鉢	2、190頁 9、51頁
66	天保七	1836	「信州伊奈村高遠□□村　石工　藤原□蔵」	平塚市岡崎　浮島稲荷神社	鳥居	27、56頁
67	天保十五	1844	「信州高遠　黒沢邨　石工　藤原幸蔵」	平塚市城所　貴船神社	供養碑	28、83頁
68	弘化二	1845	「石工信州高遠　北原忠佐衛門金貞」	相模原市上矢部　御嶽神社	灯籠	4、21頁
69	嘉永六	1853	「信州高遠住石工　伊藤宇吉」	伊勢原市下糟谷　普済寺	六字万人塔	1、68頁 3、275頁
70	安政三	1856	「石工　信州住人　幸蔵作」	平塚市城所　浄心寺	地蔵	4、18頁 28、76頁
71	安政六	1859	「信州タカトウ　石屋清兵衛」	秦野市小蓑毛	鳥居	29、119頁
72	文久二	1862	「願主　信州伊那部高遠領　石工　北原村　北原与兵衛」	伊勢原市日向　諏訪神社	手水鉢	8、105頁
73	文久三	1863	「信州伊那郡□□村　吉埜半[蔵]内　竜寧□」	平塚市小鍋島　興淵寺	地蔵	28、58頁
74	明治四	1871	「石工　信州高遠町　大石庄蔵」	清川村湯出川	廻国供養塔	12、65頁
75	明治十□年	187？	「信州伊那郡黒河内村　施主　石田□庄□」	厚木市七沢　広沢寺	水鉢ヵ	15
76	（年不詳）	（年不詳）	「信州伊那郡　高遠荒町　柿本市右エ門」	伊勢原市伊勢原　大福寺	供養碑	8、203頁
77	（年不詳）	（年不詳）	「信州住日向村　石工　北原金蔵」	伊勢原市伊勢原　大福寺	地蔵	8、204頁
78	（年不詳）	（年不詳）	「信州高島住　杉浦長治良周」	横浜市青葉区柿の木台　医薬神社	地神塔（道標）	30、13・39頁

出典の記載は、70頁を参照のこと。

表２　造立年代と造立地域

造立地域 / 造立年代	足柄上郡		足柄下郡	淘綾郡	愛甲郡			大住郡			高座郡					津久井郡			武蔵国都筑郡	合計
	山北町	南足柄市	箱根町	二宮町	愛川町	清川村	厚木市	秦野市	伊勢原市	平塚市	海老名市	綾瀬市	座間市	藤沢市	相模原市	津久井町	藤野町	城山町	横浜市	
1700～1710							2													2
1711～1720							4		2	1										7
1721～1730							1	1	1											3
1731～1740						1			1	1						1		2		6
1741～1750			1																	1
1751～1760		1								1		1								3
1761～1770		1			1	3	1		1			1	1			1		1		11
1771～1780				1			1				1						1	1		5
1781～1790									1		2				2			1		6
1791～1800	1	1		1			1		1		1			1						7
1801～1810						1	1		1	1										4
1811～1820		1					2		1											4
1821～1830		1					2			1										4
1831～1840									1	1										2
1841～1850										1					1					2
1851～1860							1	1	1	1										4
1861～1870									1	1										2
1871～						1	1													2
不明									2										1	3
小計／総計	1	5	1	2	1	6	17	2	14	9	4	2	1	1	3	2	1	5	1	78

表1をもとに作成

表３　高遠石工自身の墓石と過去帳

No.	和暦	西暦	銘文	造立場所	種別	出典
1	元文元	1736	「信州石屋　丸山源左衛門」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、275頁
2	延享四	1747	「信州諏訪知野村　石屋七右衛門」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、275頁
3	延享五	1748	「信州高遠上新山村　山崎庄七事」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、275頁
4	宝暦四	1754	「信州石屋　安右衛門」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、275頁
5	宝暦十三	1763	「信州高遠川手村　石屋安右衛門」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、275頁
6	宝暦十四	1764	「信州高遠荒町村　喜太右衛門」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、275頁
7	明和元	1764	「信州高遠上山田村　石屋数右衛門」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、275頁
8	明和五	1768	「信州伊那郡下手良村　石屋清□」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、275頁
9	安永二	1773	「信州高遠新町　山口幸右衛門」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、276頁
10	安永六	1777	「信州高遠御堂垣外村　伊藤幾右衛門」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、276頁
11	文化元	1804	「信州高遠松倉村　俗名亀松」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、276頁
12	天明五	1785	「信州高遠北原村　北原儀助」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、276頁
13	文化四	1807	「信州高遠町藤沢荒町　俗名　柿木市右衛門　行年六十五歳」	伊勢原市日向　鍛代家	墓石	9、50頁
14	文化六	1809	「信州高遠藤沢荒町村　俗名伊藤彦八　行年二十五歳」（半左衛門弟）	伊勢原市日向　鍛代家	墓石	9、50頁
15	文化八	1811	「信州高遠荒町村　勝蔵」	伊勢原市日向　鍛代家	過去帳	9、50頁
16	文化十	1813	「信州高遠藤沢荒町村　俗名伊藤彦八　行年七十七歳」（半左衛門父）	伊勢原市日向　鍛代家	墓石	9、50頁
17	文政四	1821	「信州高遠柳□□　俗名向山民弥」（信州石屋卯七抱俗名タミヤ）	伊勢原市日向　鍛代家	墓石	9、50頁
18	天保二	1831	「信州石工　茂吉」	厚木市七沢　広沢寺	過去帳，	3、276頁
19	天保三	1832	「信州石工　国太郎母」	厚木市七沢　広沢寺	過去帳	3、276頁
20	天保三	1832	「郷巌玄理禅定門　信州台村　石工　国太郎」	厚木市七沢　広沢寺	墓石・過去帳	3、276頁
21	天保五	1834	「信州高遠伊那郡北原村　俗名石工　伊藤富蔵享年三十八歳」	伊勢原市日向　鍛代家	墓石	9、50頁
22	天保七	1836	「信州高遠水上村　高橋弥右ェ門」	伊勢原市日向　鍛代家	過去帳	2、190頁 9、50頁
23	天保十三	1842	「信州伊那郡高遠荒町　伊藤廣蔵」	伊勢原市日向　鍛代家	墓石	9、50頁
24	弘化二	1845	「信州石工　友蔵」	厚木市七沢　広沢寺	過去帳	3、276頁
25	嘉永元	1848	「信州足沢　俗名嘉兵衛」	伊勢原市日向　鍛代家	墓石	3、276頁
26	嘉永元	1848	「信州高遠弥勒村　俗名伊右衛門」	伊勢原市日向　鍛代家	墓石	9、50頁 3、276頁
27	嘉永二	1849	「信州高遠黒沢邑　忠右衛門　行年三十才」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、276頁
28	明治二十	1887	「真心弦子　信州上伊那郡長藤村黒沢耕地　施主　赤羽鹿太郎」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、276頁
29	明治四十一	1908	「本覚自性大姉　信州上伊那郡長藤村黒沢笠原　宇之太郎妻登良」	厚木市七沢　広沢寺	墓石	3、276頁

出典は表1に同じ

表1及び表3の出典

1 鈴村茂『厚木の職人史　全』県央史談会厚木支部、一九八〇年
2 厚木市文化財協会『厚木の民俗一（生業一）』厚木市教育委員会、一九八一年
3 厚木市教育委員会『野だちの石仏』、一九七一年
4 澤田五十二『相模の高遠石工―高遠石工の石仏を訪ねて―』、二〇一〇年（私家版）
5 厚木市教育委員会『七沢浅間神社とその周辺に関する調査』、一九八五年
6 厚木市史編さん委員会『厚木市史史料（一）神社編』、一九七二年
7 伊勢原市文化財協会『伊勢原市石造物調査報告書一　岡崎地区』伊勢原市教育委員会、二〇〇九年
8 伊勢原市教育委員会『伊勢原の金石文』、一九七二年
9 伊勢原市教育委員会『伊勢原の民俗―職人の生活と技術―』、一九九六年
10 秦野市教育委員会社会教育課『秦野の石仏（一）―大根・南地区―』秦野市教育委員会、一九九八年
11 平塚市博物館『平塚の石仏・改訂版』三　豊田地区編、二〇〇〇年
12 清川村文化財保護委員会『清川村の郷土史』清川村教育委員会、一九八〇年
13 南足柄市教育委員会『南足柄市石造物調査報告書』三、一九八〇年
14 杉浦満寿雄「相州大山山麓の信州高遠石工」『あしなか』三〇〇　山村民俗の会、二〇一四年
15 筆者調査
16 愛川町教育委員会『愛川町の野立ち文化財―高峰地区―』愛川町文化財調査報告書三、一九六五年
17 早田旅人「近世平塚周辺の石工と石材流通―石工銘と石材による試論―」『平塚市博物館研究報告　自然と文化』三八、二〇一五年
18 相模原市立博物館『大島地区の自然と文化』、一九九九年
19 服部比呂美、山口千恵子「梅宗寺百観音石塔調査報告」『相模原市史ノート』六、相模原市市史編さん室、二〇〇九年
20 伊勢原市教育委員会社会教育課『伊勢原の庚申塔』伊勢原市教育委員会、一九八八年
21 山北町文化財保護委員会『山北の石造物』山北町教育委員会、一九九六年
22 南足柄市教育委員会『南足柄市石造物調査報告書』一、一九七八年
23 篠崎信『海老名の庚申塔』海老名市教育委員会生涯学習課、一九九六年
24 藤沢市『藤沢市史』一　資料編、一九七〇年
25 平塚市博物館『平塚の石仏・改訂版』八　金田地区編、二〇一三年
26 平塚市博物館『平塚の石仏・改訂版』二　城島地区編、一九九九年
27 平塚市博物館『平塚の石仏・改訂版』七　岡崎地区編、二〇一一年
28 平塚市博物館『平塚の石仏・改訂版』二　城島地区編、一九九九年
29 秦野市教育委員会社会教育課『秦野の石仏（三）―北・東地区―』秦野市教育委員会、二〇〇〇年
30 横浜市歴史博物館　民俗に親しむ会『歩いた・見た・調べた　鶴見川流域フィールドワーク調査報告』、二〇一五年

表1～3は、個人による報告や論文、県内の各市町村が発行した全ての民俗調査報告書及び石仏調査報告書、執筆者の調査から抽出したものである。ただし、市町村によっては未刊の報告書や内容に粗密があるため、今回作成した表の抽出状況もそれに依らざるをえないことを予めお断りしておく。また、銘文は紙面の都合上、石工に関する部分のみを掲載した。